

拡散希望 お願いいたします。

月刊「食品と暮らしの安全」
2018/12月号 No356 7~9ページ
の印刷を許可しております。

ぜひ、皆さんにお配りいただけるとうれしいです。

ホームページにてPDFもごございます。

《お問合せ》

NPO法人食品と暮らしの安全基金

TEL：048-851-1212

FAX：048-851-1214

URL：<http://tabemono.info/>

☆「食品と暮らし」と検索

<月刊誌ご購入随時お申込み受付中!!>

独自の調査情報を月刊誌で発信しています。
何がダメで、どれを選べばいいのか、企業名、商品名を歯切れよく記載できるのは、広告を取らず、購読者皆さんの購読料に支えられているからです。
ご購入で、心身を健康にして暮らしを安全にして、私たちの活動を支えてください。

発ガン性は2種類

すべてのお茶にネオニコチノイド農薬が含まれ、子宮ガンが怖いので「日本茶が危ない！」と先月号。抹茶菓子、抹茶ケーキも、もちろん危ないのです。



すべての日本茶からネオニコ農薬検出

「ほうじ茶は安全ですか」というご質問が多かったのですが、ペットボトルの表示をご覧ください。原材料が日本の緑茶です。



ウーロン茶も中国の茶葉を発酵させ、もちろん「危険」です。

前号の表では、茶葉から平均4種類、ペットボトルのお茶から平均5種類のネオニコ農薬が検出されていました。

食品安全委員会の農薬評価書では、ネオニコ農薬7種類中、2種類に発ガン性がある、と評価されています。

EUが禁止を決めたチアメトキサムは肝細胞ガン、日本でいろんな農作物に使えるよう使用規制を緩和しようとしているチアクロプリドは甲状腺ガン、子宮腺ガンと卵巣腫瘍を起こしています。

同じようなデータを使って審議してEUが禁止したのに、規則を緩和してきた日本の専門家は、どこかが狂っているのです。

殺虫や殺菌の有効濃度で農薬を残留させた収穫後に用いるポストハーベスト農薬を除

品名 ほうじ茶(清涼飲料水) ● 原材料名 緑茶 日本

けば、ネオニコ農薬が一番危険です。

「国産の農作物を食べよう」「地場の農作物を」と行政や農協(JA)は言いますが、そんな危ないことを受け入れてはいけません。

「ネオニコ農薬をやめてから言え」と反論しましょう。

ハチミツより、農業が危険に

ネオニコチノイド農薬は浸透移行性があるので、土壌に入れたり、葉に散布しておけば、植物全体に行きわたって殺虫効果を発揮するので、使い勝手がよく、急速に売り上げを伸ばして、よく使われる殺虫剤になっています。

この影響を真っ先に大きく受けたのがミツバチです。

花の蜜に殺虫剤が入っていなかったのが、神経毒性の殺虫剤が含まれるようになったので、悪影響の出ない量を含んだ蜜だけは巣に持ち帰れますが、少し多いと神経が錯乱して巣に戻れなくなり、もっと多いとミツバチは死ぬようになりました。

ミツバチが花粉を運んでくれないと、果物や実がなくなるので、農業に重大な支障が出ます。それで、EUは3種類、フランスは5種類の使用禁止を決めたのです。

先進各国がネオニコ農薬の禁止や規制強化を行っているのに、日本は、農業を守らない農林水産省が、使用規制の大幅緩和を進めています。(小若)

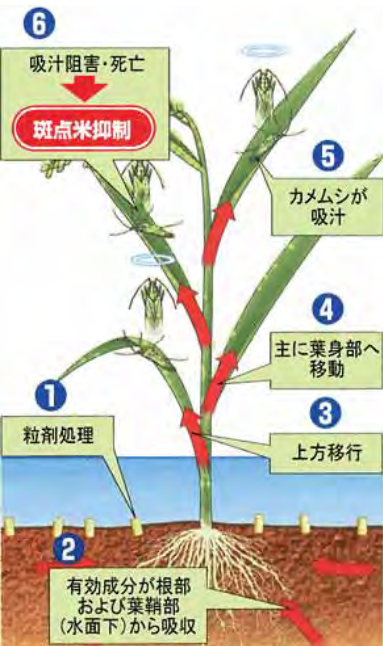
国産米が危ない!

「輸入米が危ない!」と90年代にポストハーベスト農薬の映像を発信して、輸入米は安全にしたのに、残念ながら今度は、「国産米が危ない!」と発信します。



植物を毒にして虫を殺す

穂が出始める時期になると農協がカメムシ注意報を出して、農薬散布を呼び掛けます。使われる農薬は、「スタークル」「ベストガード」「ダントツ」などで、これらの農薬の有効成分は、「ジノテフラン」「ニテンピラム」「クロチアニジン」。



しかし、ネオニコチノイド系と記載されていないので、農家の中には、ネオニコ農薬とは知らないで使っている場合もあります。

ネオニコ農薬の特徴の1つは浸透移行性です。

水を張った田んぼに粒剤を散布すると、農薬が水に溶けて根から吸収され、薬の成分が植物内を移行して、植物全体を毒にします。それで、葉の汁を吸ってもカメムシが死ぬのです。

ですから、農薬散布する光景を見かけなくても、農薬を使っていないとは限りません。

ネオニコ農薬は育苗のときにも使われます。

特長

- 2つの有効成分で、主要な病害虫を同時防除できる空中散布用の殺虫殺菌剤
- 稲いもち病、紋枯病に高い防除効果を示すアミスターとカメムシ類似の混合剤です。
- 散布適期の幅が広く、穂揃期の散布で穂いもち、紋枯病およびカメムシ
- 有効成分が2成分なので減農薬栽培米にも対応できます。

殺菌剤との混合剤もあり、「有効成分が2成分なので減農薬栽培米にも対応できる」と宣伝されているのです。

有機米や農薬不使用のコメ以外は、今はネオニコ農薬が使われていると言えます。

コメに残留していた

ネオニコ農薬の特徴の2つめは残効性で、殺虫成分が長く残るといことです。

その農薬が、カメムシ防除として収穫7日前まで計3回使われているので、残留する可能性が高くなります。そこで、厚生労働省のデータを調べると、検出されていました。

「スタークル」などの成分「ジノテフラン」は、25年度55%、27年度54%、28年度36%のコメから検出され、最大値は0.23mg/kg。

ただし、残留農薬基準2mg/kg未満なので、これらのコメも市場に出回り、消費者の口に入っているのです。

「子宮腫瘍、卵巣のう胞の増加」

ジノテフランは「哺乳類に対する安全性は高い農薬」と言われていますが、食品安全委員会の第3版評価書には「子宮腫瘍、卵巣のう胞の増加が認められた」とあります。

それでも「病理組織学的検査では子宮の腫瘍に差がなく、卵巣のう胞は同系統の老齢マウスで頻りに認められるので、ジノテフランと関連はない」と2010年に評価しました。

2018年になって、チアクロプリドに子宮ガン腫、卵巣腫瘍が認められました。

その時点で、ジノテフランが子宮腫瘍と卵巣のう胞を作った2010年のデータを再評価するのが科学的な態度です。

しかし、食品安全を軽視する食品安全委員会は、見直そうとしていません。

輸入米はネオニコ農薬なし

輸入米の残留農薬を調べると、検出限界以下。検出されたコメはありませんでした。

1991年8月、安全基金は、『世界のコメの安全性は?—輸出国のコメ事情—』を発行して、ポストハーベスト処理で殺虫剤に汚染されたコメが輸入される危険性を指摘。それが現実になったのは1993年のこと。冷害による大不作で、国はコメを緊急輸入して大問題になりました。

あれから25年たった今、日本に輸入されるコメはネオニコ農薬だけでなく、他の農薬についても安全になっていました。

カメムシ対策は色彩選別機で

実は、カメムシ対策は意味がありません。

カメムシに汁を吸われて黒くなった「斑点米」が1000粒中1粒までなら1等米、3粒までが2等米、7粒までが3等米と判定され、買い上げ価格

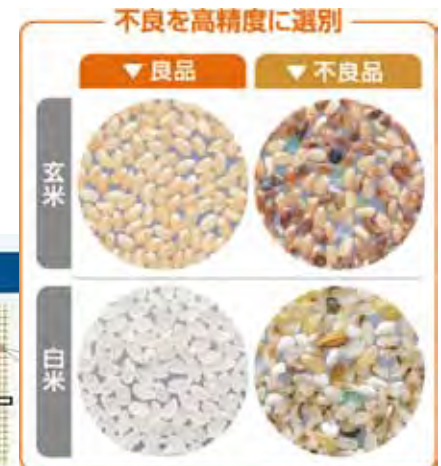
②見る 高精度CCDカメラ 2台搭載

小さなカメムシの被害も見逃さない。

デジタルラインセンサカメラで微妙な色の差、微少な黒点を見逃しません。



色彩選別機のHPより



不良を高精度に選別